1976年春季研究発表会

1976年度の春季研究発表会は，3月31日，4月1日の2日にわたって東京大学工学部で行なわれました．特別テーマは「予測と実践」．

ペーパー・フェア21論文，在来形式の発表論文33篇のほか，研究部会報告6および特別講演2件が行なわれました．

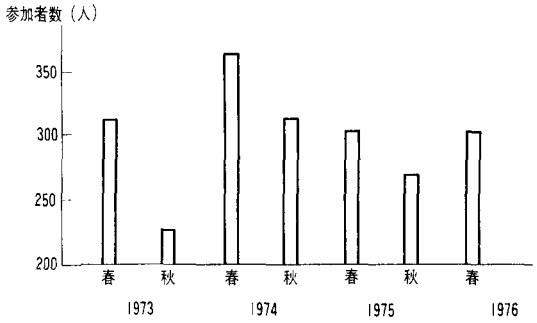
以下は3人の会員によるルポルタージュです．

ペーパー・フェア

OR学会の年2回の研究発表会の参加者数は，残念ながら最近伸び悩んでいる．下の図にみられるとおりである．この春はひさしぶりに……と期待されたが，あいにく3月30日に交通ストが決行されたため，この日に予定されていたシンポジウムがまず中止となってしまった．のみならず，研究発表会の参加者も302名に止まることとなる．内訳は正会員197，学生会員47，賛助会員32および非会員26名である．会員外からの参加は10名前後のことが多いのだが，今回の26名は学会成長の吉祥であってほしい．

発表会をひとまわりして感じられるのは，ペーパー・フェア形式の発表方法が幸い定着しそうだ，ということである．特別講演や研究部会報告，あるいは総合報告の類は，もちろん講演会形式で行なわれるべきだが，各論ふうの研究報告の大部分はペーパー・フェア形式で発表・討議されるのがもっとも効果的であろう．大会実行委員会はこのことを強く意識して，今回はペーパー・フェアのみのための時間帯を設け，この時間帯に在来形式の研究発表を同時に流すことはしなかった．

ペーパー・フェアの会場は，そのため押すな押すなの盛況であった．こころみに3月31日の2時半からはじまったセッションで，開始後20分経過したときに8ヵ所の各ブースの“客”を調べてみたところ，つぎのとおりだった：10，22，12，16，11，26，38，4．計139人，ブースあたり平均17.4人である．去年の春，東海大学ではじめてペーパー・フェアを試みたときは，7ブースだったが，人数の代表的な値は計45人，ブースあたり平均6.4人にすぎなかった．このときは在来形式の発表が同時進行していたので，参加者の1/3程度がペーパー・フェア会場を訪れたと見つもられる．



感想が量的比較に終わってしまったが，ペーパー・フェアで今回の特別テーマ「予測と実践」をあつかった研究が2篇報告され，いずれも群を抜いて多数の聴き手を吸収していたことを付け加えておきたい．（岸　尚）

特　別　講　演

大会第1日目の特別講演は「需要予測のための基本的態度」と題した，電力中央研究所の佐久間孝氏の講演であった．この講演は氏の20数年間にわたる需要予測に関する研究，およびコンサルティング活動を通じての経験にもとづき，予測に対する認識および態度についての有益な講話であった．この講演内容はいずれくわしく報告されると思うのでここでは概要だけを紹介する．

経営者とか決定者など，予測を利用する立場にある人（予測利用者）と，要請によって状況を分析し，予測を作成・提供する側（予測者）は，ともに予測に関して正しい認識をもってほしいと思う．

Ⅰ．予測利用者は

つぎのような心がまえが必要だろう：なんのための予測かを明確にする必要がある．目標と予測とは区別して考える必要がある．予測はあたらないものだという認識をもつべきだ．条件変化を受けいれるだけの経営の柔軟性を保っておくことが必要．

Ⅱ．予測者に望む

予測利用者との対話：利用者との対話不足は，利用者の目的に対する理解不足に陥りやすくなることを知るべし．また利用者への予測の説明としてなるべくやさしく説明することにつとめるいっぽう，予測の前提とか条件についての説明を怠らないことなどである．

予測者自身の態度：モデル化の能力向上，モデルの予測力改善に努力せよ．時系列的予測は条件変化に弱いことを認識せよ．データ，モデル近似，推定，説明変数な

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

どのもつ誤差から生ずる予測誤差の管理を怠らないこと．

以上がだいたいの骨子であったと思う．これら各項目のなかにはごくあたりまえと思われるものもあるけれど，具体的事例を織り込みながらの説明で非常にわかりやすくおもしろい講演であった．またここでの内容は，予測にかぎらずORのあらゆるモデル作成に関する基本的な心がまえでもあるように思う．なおこの講演が行なわれた3月31日が佐久間氏の誕生日と偶然にも一致していることがわかったので，座長をつとめられた森口会長のリードによって“Happy birthday to you”の歌を一同唱和してなごやかなうちに講演を終了した．

2日目には「予測と対策」と題する東京大学近藤次郎教授の特別講演があった．これまでのORであつかわれた問題の多くは，その問題の状況を数量的にとらえられる場合が主体であったが，現実には社会的問題のように不確実な状況のもとで決定をくださなければならない場合が非常に多い．この講演ではこういった計量化も困難な不確実な状況における問題をあつかうために開発中のPDPC(Process Decision Program Chart；過程・決定・計画・図）という興味ある手法が紹介された．この内容はアブストラクトに大変わかりやすくまとめてあるので，ここではごく簡単なあらましと感想をのべる．

PDPCの方法というのは，おおよそ(1)方針・原則または目標を明らかにすること (2)可能な最終状況をあげる (3)最終の状況までの手順をあらわす (4)途中の各状態(況)での防止対策をつくる (5)望ましい手順からの離脱の防止策を考える，という5段階からなっており，これをグラフにわかりやすく図示するものである．

一見，あたりまえのようではあるが，このように系統だてて整理しグラフ化してみると，混沌とした状況も見とおしが相当はっきりしてくるし，さらに決定者の意思がはっきりするという大きなメリットもある．

具体的適用例として日中関係，ハイジャック事件とか学園紛争の PDPC の紹介があり，その効用がつぶさにわかった．またこの PDPC のなかに既存のORの手法などを組み合せて，さらに予測とその対策に役立てることも可能であり，この手法のいっそうの拡充が期待される．実はこの PDPC は，むしろわれわれが問題を解くときのとりくみ方の過程にとりいれてもおおいに有効であるように思うし，事実これに似た手順をとっていることが多いと思われる．OR教育のはじめにこの手法の話をしてはどうであろうか．

(森清　堯)

研究部会報告

研究部会のうち6つから報告があった．その印象を2つ3つ書く．OR学会はこれまでOR教育に関する活動をあまり実施していなかったが，そのなかで，ORの実践的教育に役立つナマの材料を用意しようと，50年度に発足した「ORのためのデータとプログラム研究部会」は，目新しいものである．いくつかの問題についてのデータを利用しやすい形に収集し，典型的な解析例をつけた解説書がつくられるそうで，大学ばかりでなく，企業人に対する研修にもおおいに利用でき，仮想の数字で論じるモデルによるのとは異なり，実りある教育を進めるためのよい資料ができることと期待する．ただ，現在収集されているものには，組織内のオペレーショナルなレベルの問題が少ないが，問題の環境やメカニズムのイメージを描きながら考える大型の演習問題も，大学生の指導にはほしい．

「交通システム部会」は，実際の場からの要求で個々にかなり研究されている鉄道，航空機，船舶，道路交通の各分野を1つの場に集めて討論する場をつくったという点は評価されるので，その総合化への発展が望まれよう．

研究部会ができると，どの会もはじめは，メンバーが共同で1つの問題をあつかうとか，プロジェクトを手がけるということをしたくなる．しかし，メンバーの多様性や，企業外へデータが出にくいということから，「システム・ダイナミックス」「政策分析」「マネジメント・システム」「交通システム」各部会ともにむずかしいようである．したがって，公共の場のケースについての発表のほかは，理論面の，モデルの検証，社会的要因の数量化，行動科学的な実態調査を試みるとかの方向を考えていることは，学会の研究会としては妥当な方向であろう．

そのなかで，ローカル色濃く，しかも問題中心に発足した北海道支部の「稲作冷害対策研究部会」は注目すべきものであった．熱帯性の水稲を北海道でつくることに対して残されている，生産性の向上と高品質化のための方策の理論的考察をしようとするものだ．そこでは実験的研究をするのではなく，水稲栽培をシステムとしてとらえ，成育の各段階での必要なエネルギー特性と，その供給方法を，農業のみならず，気象，エネルギー関係の人たちを集めて，各分野でバラバラに独立に示されているこれまでの理論や実績から，問題点と対策，限界を総合的に列挙整理して，後世に残そうとするもので，混成チームを中心としてORが生かされているようであるしその成果よりも研究の進め方におおいに期待したい．とかく東京中心となりがちな学会活動に対し，地方支部からその地域の特色を生かした研究活動をしているものとして，拍手を送りたい．

(真鍋龍太郎)

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．